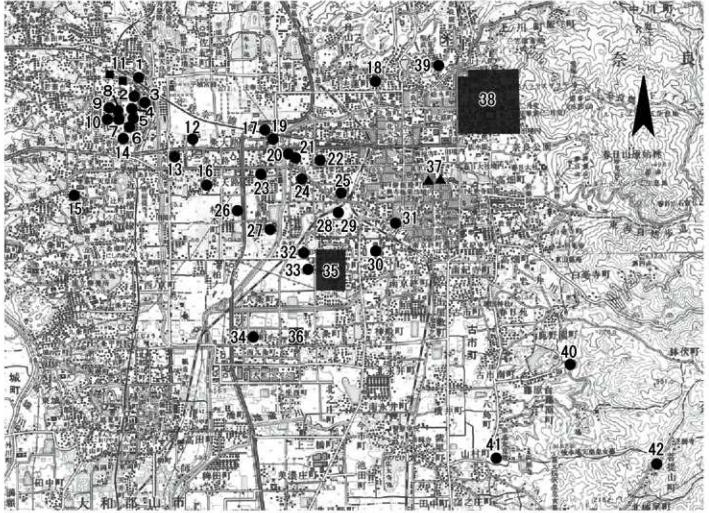




平成 22 年度秋季特別展
平城遷都 1300 年記念特別展

平城の甍

—平城京出土瓦展—



位置番号	遺跡名	町名	位置番号	遺跡名	町名
1	平城京右京一条二坊四坪	西大寺栄町	2 2	平城京在京三条四坊四坪	大宮町三丁目
2	平城京右京一条南大路	西大寺南町	2 3	平城京在京四条二坊七坪	四条大路一丁目
3	平城京右京二条二坊十六坪	西大寺国見町	2 4	平城京在京四条三坊十坪	三条栄町
4	平城京右京二条三坊二・三坪	青野町	2 5	平城京在京四条四坊十三坪	三条大宮町
5	平城京右京二条三坊三坪	菅原町	2 6	平城京在京五条一坊六坪	柏木町
6	平城京右京二条三坊四坪	菅原町	2 7	平城京在京五条二坊十四坪	大安寺西一丁目
7	平城京右京二条三坊六坪	菅原町	2 8	平城京在京五条四坊九坪	大森町
8	平城京右京二条三坊七坪	青野町	2 9	平城京在京五条四坊十五坪	大森町
9	平城京右京二条三坊十坪	青野町	3 0	平城京在京五条五坊十三坪	西木辻町
10	平城京右京二条三坊十一坪	菅原町	3 1	平城京在京五条六坊三坪	西木辻町
11	西大寺旧境内 (■)	西大寺南町	3 2	平城京在京六条三坊十坪	大安寺三丁目
		西大寺小坊町	3 3	平城京在京六条三坊十三坪	大安寺二丁目
12	平城京右京三条一坊八坪	二条大路南四丁目	3 4	平城京在京八条二坊四坪	杏南町
13	平城京右京三条一坊十四坪	三条大路五丁目	3 5	大安寺旧境内	大安寺一・二・四・五丁目
14	平城京右京三条三坊八坪	菅原東町	3 6	東市跡推定地	東九条町
15	平城京右京四条四坊十二・十三坪	平松町	3 7	元興寺旧境内 (▲)	東寺林町・北室町
16	朱雀大路	四条大路三丁目	3 8	東大寺旧境内	雜司町
17	平城京左京二条二坊十二坪	法華寺町	3 9	多聞城跡	法蓮町
18	平城京左京二条五坊北郊	法蓮町	4 0	横井麻寺	藤原町
19	平城京左京三条二坊十六坪	二条大路一丁目	4 1	山村庵寺	山村町
20	平城京左京三条三坊三坪	大宮町四丁目	4 2	正暦寺旧境内	菩提山町
21	平城京左京三条三坊六坪	大宮町四丁目			

瓦の種類と用途

棟と軒の復原

丸瓦は葺き重ね用のジョイントの有無から無段式（行基式）と有段式（玉継式）に分けられる。我が国最初の寺院である飛鳥寺には、すでに两者があるが、奈良時代以降は有段式が一般的となる。元興寺の極楽坊には今も、飛鳥寺から持ってきたといわれる無段式丸瓦が葺かれ、その屋根は魚の鱗のように、瓦の雜目が良く目立つ。

平瓦はやや曲率を持つ板状の瓦で、断面山形の面を凸面、断面谷形の面を凹面と呼ぶ。また幅の広い側を広端、もう一方の狭い側を狭端と呼ぶ。瓦葺きの際には、凹面を上にし、狭端を軒先側に置く。平瓦と丸瓦はほぼ同じ長さのものが使われるが、平瓦は3枚以上重なるように葺くため、平瓦のほうが必要枚数は多くなる。

1 丸瓦・平瓦 平城京跡各地 奈良時代（8世紀）



熨斗瓦は、2枚分の粘土を用いた粘土板を、縦半分にして作る。窯に入れて焼きあげる前に縦半分にするものもあれば、焼く前に分割用刻み線を施しておき、焼成後に半分に打ち割るが、なんらかの事情で2分割せずそのまま使用したものもある。また平瓦を縦半分にして転用する場合もある。

2 ①平瓦転用熨斗瓦 平城京右京三条一坊八坪（二条大路南四丁目）

②分割前の熨斗瓦 大安寺旧境内（大安寺一丁目、四丁目）

奈良時代（8世紀）



熨斗瓦は長方形板状の瓦で、進物の熨斗包みに似ているところからその名があるといわれる。棟を高く積み上げるために用いる。丸瓦列と平瓦列とが棟に接した部分の隙間を埋める瓦が面戸瓦である。

3 棟の復原 熨斗瓦・面戸瓦・丸瓦・平瓦
大安寺旧境内ほか 奈良時代（8世紀）



屋根の隅の部分は、普通の軒平瓦では葺けず、軒反りの最先端にもあたるため、軒反りに合った反りのある瓦が必要となる。普通の軒平瓦を隅の形に合わせ、割って使用したものもあるが、隅専用として作られた軒平瓦が、隅軒平瓦である。当然、四隅がある屋根の、入母屋造や寄棟造に必要なものであり、建物の屋根構造を考える上で資料ともなる。

4 隅軒平瓦 大安寺旧境内（大安寺一丁目）

奈良時代後（8世紀中）

屋根を飾る瓦

垂木の木口は風蝕しやすく、ここに装飾を兼ねて飾られたのが垂木先瓦である。飛鳥寺でもすでに使われている。大安寺では施釉された円形と方形の2種が出土しており、2種の垂木を用いた建物が想定できる。

5 三彩垂木先瓦 大安寺旧境内(大安寺二丁目)
奈良時代(8世紀)



6 大型方形隅木蓋瓦 平城京左京五条五坊十三坪
(西木辻町) 奈良時代(8世紀)



7 花形隅木蓋瓦 西大寺旧境内(西大寺南町)
(西木辻町) 奈良時代(8世紀)

隅木の屋根よりも外側に出る部分を風蝕から守るため、隅木上面にかぶせる瓦が隅木蓋瓦である。隅木蓋瓦の幅は、当然隅木よりも大きいので、建物の隅木の大きさが推定できる。また、隅木は切妻造には不要なため、屋根が入母屋造か寄棟造であったと考えることもできる。

花形隅木蓋瓦は、前面を花弁形に作る隅木蓋瓦で、これが唯一の例である。周縁には溝をめぐらしている。平安時代の井戸枠内から出土したが、宝亀年間(770~80)に製作された東西塔と四王院の東南瓦葺房・築地壇の創建瓦とともに出土したことから、その使用堂塔が推測される。

西大寺の財産目録である『西大寺資財流記帳』の記述から、堂塔の意匠はすこぶる華美で、奇抜、特異なものにするよう計画されたことが強く感じられるとの見方があり、創建時の華麗な西大寺の伽藍をうかがうことができる。



鶴尾は建物の大棟の両端を強く反り上げる意図から始まると考えられている。飛鳥・白鳳時代の瓦製鶴尾はよくあるが、平城京では「天平の甍」として著名な唐招提寺金堂例と西大寺出土品・伝世品しか確認されていない。奈良時代の史料から、金銅製鶴尾の存在がわかるので、奈良時代には金銅製の鶴尾を飾るのが一般的であり、そのため、瓦製鶴尾の遺例が少ないとみられている。8の鶴尾は、室町時代の土坑から出土した、鶴尾の頭部である。この鶴尾の使用建物については、金堂・講堂とも考えられるが、ここは金銅製の鶴尾を飾っていたとみられ、中門か中門での使用が考えられる。

8 鶴尾 西大寺旧境内(西大寺南町) 奈良時代(8世紀)



9 平城宮式鬼瓦

- ① 平城京右京一条二坊四坪(西大寺栄町)
- ② 平城京右京二条三坊十坪(青野町) 奈良時代(8世紀)

鬼瓦は大様や降棟の先端を飾る瓦であるが、飛鳥・白鳳時代のものは、蓮華紋を飾っていた。その名の通り、鬼のような獣面を飾るものは奈良時代に登場する。平城京内から出土する鬼瓦は、宮内から出土する平城宮式と、京内の寺院から出土する南都七大寺式に大別されている。両者の大きな違いは外区の珠紋の有無で、平城宮式にはこれがない。未だ角ではなく、二本角の鬼瓦は室町時代になって出現する。



10 南都七大寺式鬼瓦 大安寺旧境内(東九条町)
奈良時代末(8世紀後半)



11 花紋棟先飾瓦 平城京左京八条二坊四坪(杏南町)
奈良時代(8世紀)



表面

12 無紋の鬼瓦 大安寺旧境内(大安寺一丁目)
奈良時代(8世紀)



裏面

大安寺経棟で出土した無紋の鬼瓦。裏面にある固定装置の製作法が大安寺で出土する南都七大寺式鬼瓦と共に、あるいは木彫の鬼面が取り付けられていたとも考えられる。

床・壁を飾る壇

壇は、屋根に使用するものではないが、瓦の類を瓦壇類とも呼ぶ。壇はレンガであり、床に敷いたり、積み上げて壁に使用する。紋様壇も存在するが、出土品の大半は無紋壇である。



13 最大級の正方壇 大安寺旧境内（大安寺二丁目）
長方壇 平城京右京三条三坊八坪（菅原東町）
正方壇 平城京左京六条三坊十三坪（大安寺二丁目）
奈良時代（8世紀）



14 床敷きの正方壇 平城京左京三条三坊六坪
(大宮町四丁目) 奈良時代（8世紀）

側面に幾何学紋様をリーフ状に表現する。側面に紋様を飾る紋様壇は珍しく、推定金堂付近の採集品で、金堂内部の須弥壇（仏像を置く壇）など、建物の内部装飾に使用された可能性が考えられる。



隅部分の小片であるが、一边約34cm程度に復元できる。中央に宝相華紋を飾り、その外側に飛雲紋を、さらにその外側には唐草紋を巡らす。四隅付近には横から見た蓮華紋を配し、この外側には四隅から展開する唐草紋を飾る。

こうした花紋壇は統一新羅で散見され、大陸趣味豊かな遺物とみることができ、わが国には太宰府例を除いて他に例は確認されていない。左京五条一坊十六坪の調査では、京内の宅地にしては多量の瓦壇類が出土しており、宅地内に持仏堂的な瓦葺建物が存在し、その堂内の須弥壇の上面に敷いていた可能性も考えられる。

15 紋様壇 横井廃寺（藤原町）探集 飛鳥時代（7世紀）

軒瓦の組み合わせ

一遺跡の発掘調査で、軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせを抽出する方法のひとつに、出土する軒丸瓦・軒平瓦のそれぞれ最多数を占める型式同士が組み合っていたと見る考え方がある。



17 大官大寺式（文武朝）軒瓦 大安寺旧境内（大安寺一丁目・二丁目） 白鳳時代（7世紀）



18 大安寺式軒瓦 大安寺旧境内（大安寺二丁目）
奈良時代後半（8世紀中）



19 軒丸・軒平瓦 平城京左京二条二坊十二坪
(法華寺町) 奈良時代前半（8世紀前半）



20 軒丸・軒平瓦 平城京左京五条四坊十五坪（大森町）
奈良時代前半（8世紀前半）



21 軒丸瓦・軒平瓦 平城京朱雀大路（四条大路三丁目）
奈良時代後半（8世紀中）



22 軒丸瓦・軒平瓦 平城京左京五条二坊十四坪
(大安寺西一丁目) 奈良時代後半（8世紀中）



23 軒丸瓦・軒平瓦 平城京左京三条二坊十六坪
(二条大路一丁目) 奈良時代後半（8世紀中）



24 大安寺西塔の軒瓦 大安寺旧境内（東九条町）
奈良末～平安時代初（8世紀末～9世紀初）

発掘調査で大量の瓦が出土した場合、建物の創建年代を最多数を占める瓦で決める。最も大量に瓦を必要とするのは、その建物が建ったときであるから、使った最も量の多い瓦で、その建物の創建年代を決めるというわけである。出土量の少ない瓦は、建物を修理したときの補足瓦と理解できる。補足瓦を検討することは、その建物の維持管理がどのように行われていたかを考える材料となる。

平瓦の作り方 一桶巻き作りから一枚作りへ

古代の平瓦は、細長い板を縦に重ねた桶のような内型に、粘土板や粘土紐を巻きつけて粘土円筒を作り、これを4分割して作った桶巻き作り平瓦と、凸型に湾曲した成形台で、1枚ずつ作って一枚作り平瓦がある。北部九州など一部の地域を除いて、奈良時代になると桶巻き作りから一枚作りに移行した。

桶巻き作り



25 分割前の桶巻き作りの円筒(復原品)



26 桶巻き作り平瓦

- ①横井廃寺（藤原町）採集
- ②平城京朱雀大路（四条大路三丁目）
白鳳時代（7世紀後半～8世紀初）



凸面に布目が残る平瓦である。桶型の外側ではなく、内側に粘土板を巻き付けた桶巻き作り説と、凸型に湾曲した成形台を使用した一枚作り説の二つが考えられる。大安寺では、粘土板の合わせ目が残るものがあり、桶巻き作りとも考えられる。

27 凸面布目平瓦 大安寺旧境内
(大安寺四丁目・五丁目)
奈良時代（8世紀）

一枚作り



28 一枚作り平瓦 平城京跡各地 奈良時代（8世紀）

珍しい瓦① 最大の瓦・最小の瓦



29 ①通常の軒平瓦
平城京左京六条三坊十三坪
(大安寺二丁目)
②最大の軒平瓦 大安寺旧境内
(大安寺四丁目)
奈良時代後半（8世紀後半）

最大の軒平瓦は、平面プラン・各柱間が平城宮朱雀門と同規模の大安寺南大門で出土した。瓦当面の高さは約13cmで、通常の軒平瓦の2倍近くある。紋様構成が同じ軒平瓦（①）を参考に全体を復原してみると、幅が①の約3倍に達する約60cmもの大きさであったと考えられ、日本最大の軒平瓦であることがわかる。

切妻造りの破風は、強化のために、厚みがあり重い瓦（破風専用の瓦を蠟羽瓦という）を葺くことが多く、南大門屋根の破風部分に用いたと考えられる。

30 小型瓦 平城京右京三条三坊八坪(菅原町)
奈良時代後半（8世紀後半）31 最小の丸瓦 平城京左京五条四坊十五坪
(大森町) 奈良時代（8世紀）

30は、室町時代の瓦積み井戸の構築部材に転用されていた小型瓦である。西へ13km離れた菅原遺跡から運ばれたものとみられる。菅原遺跡では、小型の瓦を葺いた東向きの堂がみつかり、行基創立の四十九院のひとつ長岡院に推定されている。

軒瓦の歴史

飛鳥時代

瓦でいう飛鳥時代とは飛鳥寺創建の6世紀末頃から山田寺造営の7世紀中頃までである。

飛鳥時代の軒丸瓦は子葉のない単弁（無子葉單弁）蓮華紋を飾り、弁は平面的である。中房が小さく、外区は紋様がない。軒平瓦は主に広瀬を軒先側に置いた平瓦を2枚重ねていた。他には紋様の型紙を瓦に押し付け、その上から紋様を彫った軒平瓦や、紋様を1単位だけあらわしたスタンプを作り、これを紋様面に連続して天地交互逆に押捺して作ったものがある。これらはいずれも軒平瓦の製作の試行錯誤の段階のものと理解できるが、軒丸瓦と同様に、なぜ範型を用いた軒平瓦を作らなかつたのか興味深い。

32 飛鳥寺創建軒丸瓦 元興寺旧境内(東寺林町)
飛鳥時代（6世紀末）33 姫寺庵寺所用軒丸瓦 東市跡推定地（東九条町）
飛鳥時代（7世紀）34 横井庵寺軒丸瓦 横井庵寺（藤原町）採集
飛鳥時代（7世紀）

西暦538年(552年説あり)に仏教が百濟から伝わってちょうど半世紀、588年に日本初の寺院、飛鳥寺が創建される。このとき瓦作りには四人の瓦博士が参加したと伝える。飛鳥寺創建瓦は先端に切り込みのある弁をもつものと、弁先端に点をもつものとの大きく2つに分けられる。接続する丸瓦も異なり、前者は無段式、後者は有段式であり、飛鳥寺には2つの異なる造瓦集団が関わったとみることができる。

白鳳時代

瓦でいう白鳳時代は、7世紀中頃から平城京遷都（710）までの8世紀初頭までである。

軒丸瓦は大型化し、唐の影響とされる蓮弁内に子葉をいたれた有子葉蓮弁や、蓮弁が2つずつ1組になった複弁が出現する。蓮弁自体も立体的となる。中房は大きくなり、蓮子が中央の1個を中心いて2重に巡り、外区にも紋様を飾るようになる。7世紀末頃になると、軒丸瓦の外区を2つに分け、内側に珠紋、外側に锯歯紋を巡らすものが出現する。



35 姫寺廣寺所用軒丸瓦 東市跡推定地（東九条町）
白鳳時代（7世紀後半）



36 山村廣寺軒丸瓦 山村廣寺（山町）採集
白鳳時代（7世紀後半～8世紀初）

37 法輪寺所用軒丸瓦 平城京右京二条三坊二・三坪（青野町）
法隆寺式軒平瓦 平城京左京五条六坊三坪（西木辻町）
白鳳時代（7世紀後半）



38 四重弧紋軒平瓦 大安寺旧境内（大安寺一丁目・二丁目）
六重弧紋軒平瓦 平城京右京四条四坊十二・十三坪
(平松町) 白鳳時代（7世紀後半）

軒平瓦は、飛鳥時代に平瓦を重ねたことを表現した重弧紋や、バルメット唐草紋が出現し、7世紀末頃になると、一方から他方へ展開する偏行唐草紋が主流となる。外区には、軒丸瓦と同様に珠紋・鋸歯紋を飾る。平城京大安寺の前身寺院である文武朝大安寺の軒平瓦は均整唐草紋を採用しており、これは奈良時代に主流となる。

奈良時代

奈良時代の当初の軒瓦は7世紀末頃の紋様構成を踏襲したが、軒丸瓦の蓮弁は平板的になり、ひとまわり小さくなる。軒丸瓦は複弁蓮華紋、軒平瓦は均整唐草紋が主流となるが、新たに重圓紋軒丸瓦、重郭紋軒平瓦が出現する。

奈良時代中頃になると単弁蓮華紋軒丸瓦が出現する。東大寺式軒瓦に代表されるように、軒丸瓦は外区外縁の紋様をなくしたもののが現れ、軒平瓦は、宝相華紋の中心飾りを設けた均整唐草紋が出現する。東大寺式軒瓦の紋様構成は、平安時代前半までその影響をうけたものが製作される。

奈良時代後半になると、軒丸瓦は単弁蓮華紋が増え、軒平瓦は東大寺式のものが多いが、紋様は退化し、唐草に勢いがなくなっている。また精緻な紋様の軒丸瓦も製作され、これは統一新羅の軒瓦の影響と考えられている。

なお、平城京から出土する軒瓦については、軒丸・軒平瓦あわせて約700種を数え、4桁の数字とアルファベットからなる型式番号が設定されている。末尾に小文字のアルファベットがつくものは、範型を途中で彫り直したことが確認できるもので、彫り直しの段階を示す。



39 複弁蓮華紋軒丸瓦 6 3 0 4 D・均整唐草紋軒平瓦 6 6 6 4 A
大安寺旧境内（大安寺四丁目） 奈良時代前半（8世紀前半）



40 重圓紋軒丸瓦 6 0 1 2 C
大安寺旧境内（大安寺二丁目）
奈良時代前半（8世紀中）



41 重郭紋軒平瓦 6 5 7 2 J
大安寺旧境内（大安寺二丁目）
奈良時代後半（8世紀後半）



42 中心飾りが宝相華紋の
均整唐草紋軒平瓦 6 7 3 2 C
平城京右京二条三坊四坪
(菅原町)
奈良時代後半（8世紀後半）



43 単弁蓮華紋軒丸瓦 6 1 3 3 M 平城京右京二条三坊六坪
(菅原町) 奈良時代後半（8世紀後半）



44 東大寺式軒丸瓦 6 2 3 5 I 大安寺旧境内(大安寺二丁目)
奈良時代後半（8世紀後半）



45 均整唐草紋軒平瓦 6 7 1 0 C
平城京左京三条二坊十六坪
(二条大路一丁目)
奈良時代後半（8世紀中）



46 統一新羅の影響を受けた均整唐草紋軒平瓦
6 7 6 0 A
平城京右京二条三坊二・三坪(青野町)
奈良時代後半（8世紀後半）



47 軒平瓦の額部
①直線額 平城京右京二条三坊十一坪(菅原町)
奈良時代前半（8世紀前半）
②曲線額 平城京右京二条三坊六坪(菅原町)
奈良時代後半（8世紀後半）

平城宮内出土軒平瓦は額部の形態から、大きく、段額→直線額・曲線額の順に変化し、段額は奈良時代後半にはなくなる。ただし大安寺では、平安時代初めまで創建が下るとみられる西塔の軒平瓦は段額で、奈良時代を通して段額の軒平瓦を使用する。この違いは宮の造営は造官省が、大安寺の造営は造大安寺司が担っており、造瓦組織の違いによるものと考えられる。

平安時代

平安時代前半では、紋様構成のうえでは、奈良時代末頃のものと比較して大きな変化はない。ただし大和では白鳳時代の紋様をまねた復古調のものが出現する。

平安時代後半になると、地方産の瓦が平安京に持ち込まれたこともあり、大きさだけでなく、塔婆・梵字を飾る軒平瓦など紋様の多様化も進む。大和では大安寺出土品にみられるような、蓮華紋の中房内に巴紋を飾る軒丸瓦も出現する。



48 軒平瓦 大安寺旧境内(大安寺一丁目ほか)

①平安時代前半（8世紀末～10世紀初） ②平安時代後半（11世紀） ③平安時代後半（11世紀中～12世紀末）



49 復古調軒丸瓦 大安寺旧境内(大安寺二丁目)
平安時代後半（11世紀）



50 ①蓮華巴紋軒丸瓦
大安寺旧境内(大安寺四丁目)
②巴紋軒瓦
大安寺旧境内(大安寺一丁目)
平安時代後半（12世紀初）

軒瓦の歴史

鎌倉時代



51 「東大寺大佛殿」文字紋軒瓦 東大寺旧境内（雜司町）
鎌倉時代前半（12世紀末）



室町時代



53 軒丸瓦・軒平瓦 大安寺旧境内（大安寺二丁目）
室町時代前半（14世紀初）



54 軒平瓦 大安寺旧境内（大安寺二丁目・四丁目）
①室町時代前半（14世紀末～15世紀前半）
②室町時代後半（15世紀末）③室町時代後半（16世紀前半）

鎌倉・室町時代以降の製作技法



55 頸貼り付け技法 東大寺旧境内（雜司町）
鎌倉時代前半（12世紀末）



56 瓦当貼り付け技法 大安寺旧境内（大安寺二丁目）
鎌倉時代後半（13世紀中）



57 頸貼り付け技法 正暦寺旧境内（菩提山町）
江戸時代後半（19世紀）



58 糸切り痕の残る丸瓦 大安寺旧境内
(大安寺四丁目) 江戸時代後半（19世紀）



59 鉄線切り痕の残る丸瓦 正暦寺旧境内
(菩提山町) 江戸時代後半（19世紀）

コピキとは瓦の大きさに応じた粘土板を切り取ることで、丸瓦凹面に残る切断痕の違いから、2手法に分類される。一つは緩い弧線が無数につく、糸切りとみられるもの。いまひとつは粘土中の砂粒の移動したあとが、横筋になってあらわれるものをいい、軸木につきつけた張力の大きい鉄線を用いたものと考えられる。鉄線切りは、16世紀末ごろにあらわれる。

戦国時代



60 多聞城創建軒瓦 多聞城跡（法蓮町）
戦国時代（16世紀）

永禄年間（1558～70）に松永久秀によって築かれた多聞城は、瓦葺きで、近世城郭の先駆けともいべき城であつたことが、訪れたボルトガル人宣教師の記録からわかる。この記録で多聞城の瓦は、美しい黒一色の瓦で、一度葺けば四、五百年は保つと紹介されている。築城の際に製作された軒平瓦は、中心に花弁を飾るもので、額貼り付け技法によって製作され、瓦当外区面は平滑に仕上げる。多聞城は天正4年（1576）に破却され、出土瓦だけが当時を偲ばせる。

江戸時代

享保年間（1716～35）になると、防火のため瓦葺きが奨励され、17世紀後半に考案されていた棟瓦が急速に普及する。



62 巴紋軒丸瓦 大安寺旧境内（大安寺二丁目・四丁目）
①江戸時代前半（18世紀後半）②江戸時代後半（19世紀）



63 「菩提山寺」「観音堂」文字紋軒丸瓦 正暦寺旧境内
(菩提山町) 江戸時代後半（19世紀）



64 接合部の刻み目が分かる軒丸瓦 正暦寺旧境内
(菩提山町) 江戸時代後半（19世紀）

鉄線切りの瓦が全国的に波及していく、軒平瓦両面の布目痕は完全になくなる。軒丸瓦・軒平瓦とともに、接合面には刻み目を施す。

橋紋軒平瓦の変遷



橋紋軒平瓦は17世紀中頃には出現し、19世紀以降現代まで主流となる。



66



67



68



69



70

65～70 橋紋軒平瓦 正暦寺旧境内（菩提山町）
江戸時代後半（19世紀）

彩られた瓦

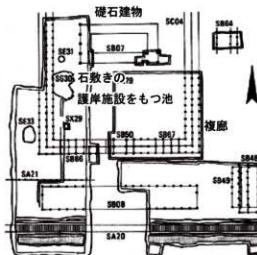
軸葉を瓦に施した豪華な瓦。普通、遺跡で出土する施釉瓦は駁斗瓦が多く、平瓦が少ないという特徴から、屋根を縁取るよう主に棟・軒先で使用したと考えられている。

三彩瓦は平城京以外では、樋ノ口遺跡（京都府精華町）でしか確認されておらず、平城京特有の瓦といえる。



71 三彩施釉瓦 平城京左京二条二坊十二坪（法華寺町）
奈良時代（8世紀）

左京二条二坊十二坪では三彩施釉瓦が680点出土した。平城宮内でもこれほどの量の三彩瓦はみられない。また十二坪では平瓦が多く出土しており、屋根全体を施釉瓦で飾った建物の存在が考えられる。



平城京左京二条二坊十二坪で検出した遺構

左京二条二坊十二坪では、四面廻付きの礎石建物を中心とし、その周囲を掘立柱の複廊で囲むという特異な建物配置を検出した。礎石建物の南西には石敷きの護岸施設をもつ池も見つかっている。そのためこの十二坪は、大量の三彩施釉瓦を用いた建物が造られた、京内離宮の可能性が考えられている。

兄弟の瓦

同范瓦の新旧

瓦の紋様は、基本的に「範型」とよぶ木型を粘土に押しつけることによってつける。ひとつの範型から作られた瓦を「同范瓦」と呼ぶ。木製品である範型は使用するうちに、傷ができたり、すり減った範型の紋様を彫り直す必要が出てくる。同じ範型から作られた製品でも、範型の減り具合や彫り直しを見つけることで、製作年代の時期差がわかり、瓦が供給された順序もわかる。



72～75 軒丸瓦 6 1 3 8 C a の変遷
大安寺旧境内（大安寺二丁目ほか）
奈良時代（8世紀）



76 キズのない軒丸瓦 6 3 0 8 B
76～77 割れた範型から作られた軒丸瓦 6 3 0 8 B
76 平城京左京三条四坊四坪（大宮町三丁目）
77 平城京右京二条三坊三坪（菅原町）
奈良時代前半（8世紀前半）



78 范キズのない6 7 1 2 B



79 左下の珠紋部分が欠けた6 7 1 2 B



80 左下の珠紋部分の欠けがさらに広がった6 7 1 2 B

同範瓦が教えてくれること

瓦は、範型さえ同じものを使用していれば、生産した工房・工人が異なったとしても、全く同じ紋様の瓦を作ることができる。しかし、古代に範型は自由に持ち出し可能な物ではなく、厳重に管理されていたと考えられることから、同範瓦を有する遺跡同士は何らかのつながりがあり、範型の移動の背景には、何らかの政治的配慮があったとみなすこともできる。

●飛鳥寺東南禪院と禪院寺

81 飛鳥寺東南禪院所用軒瓦 平城京右京三条一坊十四坪
(三条大路五丁目) 飛鳥時代 (7世紀末)

1992年の飛鳥寺東南部の調査で、複八弁蓮華紋軒瓦・重弧紋軒平瓦、竹状模骨丸瓦が出土し、東南禪院と推定されていた。東南禪院は道昭が7世紀後半に建て、平城遷都にともない右京四条一坊に移建され、禪院寺となつことが知られる。右京三条一坊十四坪からの出土瓦は、飛鳥の東南禪院から運んできたものと考えられ、調査地周辺に禪院寺があったことをうかがわせる。

82 竹状模骨丸瓦 平城京右京三条一坊十四坪
(三条大路五丁目) 飛鳥時代 (7世紀末)83 平松庵寺所用軒丸瓦 平城京右京三条四坊十二・十三坪
(平松町) 奈良時代初 (8世紀前半)

平城京内で、飛鳥・白鳳時代の寺院の軒瓦が出土することについては、大きく二通りの考え方ができる。一つは、平城遷都以前に寺院がその地に造営されていたという考え方（海童王寺など）、いま一つは平城遷都にともない、平城京に飛鳥・藤原の地から移建され、その時に瓦も一緒に運ばれてきたという考え方（元興寺、大安寺など）である。

●外区の線鋸歯紋が特徴的な軒瓦の分布

84 姫寺庵寺所用軒瓦
東市跡推定地 (東三条町)
奈良時代前半 (8世紀前半)

軒丸瓦は外区に大振りの線鋸歯紋を、軒平瓦は外区全体に線鋸歯紋を巡らす点が特徴的な一组で、奈良時代前半の製作とみられる。ところが、この軒瓦の出土分布は、横井庵寺・平松庵寺・姫寺庵寺・七条庵寺（奈良市七条町）など、平城遷都時に移建された寺院も含む飛鳥・白鳳時代の創建寺院に限られ、この軒瓦は平城遷都以前からあった寺院にのみ供給されたものとみられる。

兄弟の瓦

平城京出土の軒瓦は、大きく3つに分けられる。一つは平城宮内を中心に出土する宮専用の瓦で「平城宮式」軒瓦と呼ばれ、その造瓦所は造宮省の管理下にあったとみられる。いま一つは大安寺・東大寺など京内各寺院専用の軒瓦で、寺院名をとて「大安寺式」「東大寺式」軒瓦とよばれ、その造瓦所は各造寺司の管理下にあったとみられる。さらに宮内・寺院からは出土せず、平城宮内専用といべき一群が「平城京式」軒瓦とよばれる。

「平城宮式」軒瓦と国分寺出土の瓦には同范関係がないことから、中央政府が、国分寺創建に援助を行ったことはなく、これは国分寺が地方財政で造営されたことによるとの指摘がある。ただし、ごく稀に京内寺院と同范関係がある国分寺がみつかっており（信濃国分寺と西隆寺を含め数例のみ）、各造寺司が協力したものと解説されている。これらの同范関係を分析することにより、地方と中央の関係、国分寺造営の困難さなどを同范瓦は語ってくれる。

●信濃国分寺と西隆寺



85 信濃国分寺同范軒瓦
平城京右京二条二坊十六坪（西大寺国見町）
奈良時代後半（8世紀後半）

13世紀後半に造られた瓦積井戸の構築部材として転用された形で発見された。他の転用軒瓦の分析から、もとは西隆寺で使用されていたものとみることができる。

同范関係から信濃国分寺（長野県上田市）の創建瓦と同じ型から作られていることがわかった。製作技法も信濃国分寺と西隆寺は同じであることが発見され、信濃国分寺創建は西隆寺造営終了間際の769～71年頃と位置付けることができ、国分寺建立の詔から20年以上経つから造られた国分寺もあったことを教えてくれる。

●安芸国分寺と平城京



安芸国分寺同范軒丸瓦 6308R 平城京左京五条四坊十五坪（大森町）
安芸国分寺同范軒丸瓦 安芸時代表前半（8世紀前半）

本年度の春、「平城京式」の2種の軒丸瓦（6308 J・6308 R）が安芸国分寺（広島県東広島市）創建瓦と同范であることがわかった。「平城京式」軒瓦と国分寺の瓦との同范関係が明らかになった初例である。実物照合による観察から、平城宮内に供給後、型が安芸国に運ばれ、その地で安芸国分寺創建用に製作されたことがわかった。すなわち、安芸国分寺創建に、平城京専用の瓦を作る造瓦所が援助したとみることができる。型が移動した背景については、今後さらに研究が必要である。

●播磨国府と播磨調邸



87 播磨産軒瓦 古大内式軒瓦 平城京左京五条四坊九坪（大森町）
奈良時代（8世紀）



88 播磨産平瓦・熨斗瓦 平城京左京五条四坊九坪（大森町）
奈良時代（8世紀）

軒丸瓦・軒平瓦ともに古大内遺跡（兵庫県加古川市）出土瓦を標識名とする「古大内式」軒平瓦で製作技法等から播磨産であることがわかる。「古大内式軒瓦」は、「播磨國府系瓦」の一種と考えられている。「播磨國府系瓦」はその出土分布が、播磨国内の国府・国分寺・国分尼寺・そして山陽道沿いの駅屋であり、播磨國司の管理下において、生産と配布がなされた一群の軒瓦と定義付けされている。他に播磨産とみられる平瓦・熨斗瓦・土器も出土しており、左京五条四坊九坪には「播磨國の平城京出張所」ともいべき播磨國の調邸があった可能性が指摘できる。

文字・記号のある瓦

修理司の文字瓦



89 修理司の文字瓦 平城京跡各地 奈良時代後半（8世紀後半）

平城京内、特に宮内大垣や西隆寺からは、「修」・「理」と押捺された文字瓦が出土する。合わせて「修理」となり、修理司（宮内の修理に関係する役所）の製作瓦とみられる。

史料では西隆寺造営長官と修理司の長官は兼任されていることがわかり、西隆寺で「修」・「理」の刻印瓦が出土する背景は、修理司の瓦工が西隆寺造営に勤務されたためと考えられている。

恭仁宮式文字瓦



90 恭仁宮式文字瓦 平城京跡各地 奈良時代後半（8世紀中）

恭仁宮（京都府木津川市）からは、人名を記した瓦が出土する。同じ名を押捺した瓦は法量・製作技法・押捺の位置が似ることから、瓦工人が検収を受けるために自分の名を記したもので、工人の賃金支給や労務管理など工房の経営に関わるものと考えられている。

大安寺の記号瓦

大安寺で確認されている刻印である。厚さ1mmほどの金属板を「丁」の字形に曲げた用具を使って押捺している。軒丸瓦は内面に1回だけ押捺し、軒平瓦は、瓦当面の中心に2回押捺している。焼成前に押されており、製作工または工人の労務管理者によるものという可能性が考えられる。

91 大安寺の記号瓦 大安寺旧境内（大安寺二丁目・四丁目）
奈良時代後半（8世紀中）

いろいろな文字瓦

92 「矢」「田」「瓦」刻印瓦
平城京左京五条一坊十六坪（柏木町）
奈良時代（8世紀）93 「西」刻印丸瓦 西大寺旧境内（西大寺小坊町）
奈良時代（8世紀）
「物部」線刻軒平瓦 元興寺旧境内（東寺林町）
平安時代（9世紀）

「矢」「田」は平瓦、「瓦」は丸瓦の端面、「西」「物部」は丸瓦の凸面に文字を刻印、または線刻している。焼成前に付けられたものであり、瓦工人によるものと考えられるが、その理由は現在のところ定まった説はない。

珍しい瓦② 土製品と同范の瓦



瓦の範型を用いて、製作されたスタンプ状土製品で、我が国には他に例がない。使用された範型は6301J型式であるが、外区部分の紋様は削り取っている。梵鐘などの梵音具の撞座部分製作のため工具との指摘がある。

94 蓬華紋押型土製品 平城京右京二条三坊七坪（青野町）

土製品と同范の軒丸瓦 6301J 平城京右京二条三坊七坪（青野町）奈良時代前半（8世紀中）

異物の混じる瓦



瓦の胎土に土器や種子など異物が混じっている。意図的なものではなく、偶然粘土に含まれていたものが、そのまま焼成されたものであろう。

95 ①土師器が混じる軒平瓦 元興寺旧境内（北室町）鎌倉時代（13世紀）

②ダメの種子が混じる平瓦 平城京右京二条三坊十一坪（青野町）奈良～平安時代

③瓦器が混じる軒平瓦 西大寺旧境内（西大寺小坊町）鎌倉時代（13世紀）

屋根と瓦の名称
(平城宮朱雀門)



展示品目録

瓦の種類とその用途

番号	展示品名	遺跡名	所在地	年代	点数
1	無段式丸瓦	平城京左京二条二坊十二坪	法華寺町	8世紀	2
	有段式丸瓦	平城京左京二条二坊十二坪	法華寺町	8世紀	1
	平瓦	平城京左京六条三坊十三坪	大安寺二丁目	8世紀	1
2	平瓦を転用した熨斗瓦	平城京右京三条一坊八坪	二条大路南四丁目	8世紀	1
	分割前の熨斗瓦	大安寺旧境内	大安寺一丁目	8世紀	2
3	丸瓦	平城京左京三条三坊三坪	大宮町四丁目	8世紀	1
		平城京左京二条二坊十二坪	法華寺町	8世紀	1
		平城京右京三条一坊八坪	二条大路南四丁目	8世紀	1
	平瓦	平城京左京二条二坊十二坪	法華寺町	8世紀	1
		平城京右京二条三坊四坪	菅原町	8世紀	1
		大安寺旧境内	大安寺一丁目	8世紀	1
	熨斗瓦	大安寺旧境内	大安寺一・二丁目	8世紀	2
	面戸瓦	大安寺旧境内	大安寺四丁目	8世紀	2
4	剛軒平瓦	大安寺旧境内	大安寺一丁目	8世紀中	2
5	三彩垂木先瓦	大安寺旧境内	大安寺二丁目	8世紀	6
6	大型方形隅木蓋瓦	平城京左京五条五坊十三坪	西木辻町	8世紀	5
7	花形隅木蓋瓦	西大寺旧境内	西大寺南町	8世紀	1
8	鶴尾	西大寺旧境内	西大寺南町	8世紀	1
9	平城宮式鬼瓦	①平城京右京一条二坊四坪 ②平城京右京二条三坊十坪	西大寺宋町	8世紀	1
10	南都七大寺式鬼瓦	大安寺旧境内	青野町	8世紀後半	1
11	花紋棟先飴瓦	平城京左京八条二坊四坪	東九条町	8世紀	1
12	無紋の鬼瓦	大安寺旧境内	杏南町	8世紀	1
13	最大級の正方博	大安寺旧境内	大安寺一丁目	8世紀	1
	長方博	平城京右京三条三坊八坪	菅原東町	8世紀	1
	正方博	平城京左京六条三坊十三坪	大安寺二丁目	8世紀	1
14	床敷の正方博	平城京左京三条三坊六坪	大宮町四丁目	8世紀	1
15	紋様博	横井庵寺探集	藤原町	7世紀	2
16	花紋博	平城京左京五条一坊十六坪	柏木町	8世紀	1

軒瓦の組み合わせ

17	大官大寺式（文武朝）軒瓦	大安寺旧境内	大安寺一・二丁目	7世紀	2
18	大安寺式軒瓦	大安寺旧境内	大安寺二丁目	8世紀中	2
19	軒丸瓦・軒平瓦	平城京左京二条二坊十二坪	法華寺町	8世紀前半	2
20	軒丸瓦・軒平瓦	平城京左京五条四坊十五坪	大森町	8世紀前半	2
21	軒丸瓦・軒平瓦	朱雀大路	四条大路三丁目	8世紀中	2
22	軒丸瓦・軒平瓦	平城京左京五条二坊十四坪	大安寺西一丁目	8世紀中	2
23	軒丸瓦・軒平瓦	平城京左京二条十六坪	二条大路一丁目	8世紀中	2
24	大安寺西塔の軒瓦	大安寺旧境内（西塔）	東九条町	8世紀末～9世紀初	2

平瓦の作り方

25	分割前の桶巻き作り円筒（復原品）				
26	桶巻き作り平瓦	①横井庵寺探集 ②朱雀大路	藤原町 四条大路三丁目	7世紀後半 ～8世紀初	1
27	凸面布目瓦	大安寺旧境内	大安寺四・五丁目	8世紀	2
28	一枚作り平瓦	平城京左京四条二坊七坪 平城京左京二条二坊十二坪 平城京右京三条一坊八坪 平城京右京二条三坊二・三坪	四条大路一丁目 法華寺町 二条大路南四丁目	8世紀	1
		青野町			1

珍しい瓦①

2 9 通常の瓦	平城京左京六条三坊十三坪	大安寺二丁目	8世紀後半	1
	大安寺旧境内	大安寺二・四丁目	8世紀後半	3
3 0 小型瓦	平城京右京三条三坊八坪	菅原町	8世紀後半	9
3 1 最小の丸瓦	平城京左京五条四坊十五坪	大森町	8世紀	1

軒瓦の歴史

飛鳥時代

3 2 飛鳥寺創建軒丸瓦	元興寺旧境内	東寺林町	6世紀末	1
3 3 姫寺廢寺所用軒丸瓦	東市跡推定地	東九条町	7世紀	1
3 4 横井庵寺軒丸瓦	横井庵寺探集	菅原町	7世紀	4

白鳳時代

3 5 姫寺廢寺所用軒丸瓦	東市跡推定地	東九条町	7世紀後半	1
3 6 山村廢寺軒瓦	山村廢寺探集	山町	7世紀後半～8世紀初	2
3 7 法輪寺所用軒丸瓦	平城京右京二条三坊二・三坪	青野町	7世紀後半	2
法隆寺式軒平瓦	平城京左京五条六坊三坪	西木辻町	7世紀後半	1
3 8 四重弧紋軒平瓦	大安寺旧境内	大安寺一・二丁目	7世紀後半	2
六重弧紋軒平瓦	平城京右京四条四坊十二・十三坪	平松町	7世紀後半	1

奈良時代

3 9 複弁蓮草紋軒丸瓦	均整唐草紋軒平瓦	大安寺旧境内	大安寺四丁目	8世紀前半	1
4 0 重圓紋軒丸瓦	大安寺旧境内	大安寺二丁目	8世紀中	1	
4 1 重郭軒平瓦	大安寺旧境内	大安寺二丁目	8世紀後半	1	
4 2 均整唐草紋軒平瓦	平城京右京二条三坊四坪	菅原町	8世紀後半	1	
4 3 単弁蓮草紋軒丸瓦	平城京右京二条三坊六坪	菅原町	8世紀後半	1	
4 4 東大寺式軒丸瓦	大安寺旧境内	大安寺二丁目	8世紀後半	1	
4 5 均整唐草紋軒平瓦	平城京左京三条二坊十六坪	二条大路一丁目	8世紀中	1	
4 6 統一新羅の影響を 受けた軒平瓦	平城京右京二条三坊二・三坪	青野町	8世紀後半	1	
4 7 軒平瓦の顎部①段顎	平城京右京二条三坊十一坪	菅原町	8世紀前半	1	
②曲線顎	平城京右京二条三坊六坪	菅原町	8世紀後半	1	

平安時代

4 8 軒平瓦	①大安寺旧境内	大安寺一丁目	8世紀末～10世紀初	1
	②大安寺旧境内	大安寺四丁目	11世紀	1
	③大安寺旧境内	大安寺二・四丁目	11世紀中～12世紀末	1
	大安寺旧境内	大安寺四丁目	11世紀	1
4 9 復古調軒丸瓦	大安寺旧境内	大安寺二丁目	11世紀	1
5 0 ①蓮華巴紋軒丸瓦	大安寺旧境内	大安寺四丁目	12世紀初	1
②巴紋軒丸瓦	大安寺旧境内	大安寺一丁目	12世紀初	1

鎌倉時代

5 1 「東大寺大佛殿」文字紋軒瓦	東大寺旧境内	雜司町	12世紀末	3
5 2 「大安寺」文字紋軒瓦	大安寺旧境内	大安寺二・四丁目	13世紀中	2
「大安寺塔」文字紋軒丸瓦	大安寺旧境内	東九条町	13世紀中	2
「大安寺寶塔」文字紋軒平瓦	大安寺旧境内	大安寺二・四丁目	13世紀中	2

室町時代

5 3 軒丸瓦・軒平瓦	大安寺旧境内	大安寺二丁目	14世紀初	2
5 4 軒平瓦	①大安寺旧境内	大安寺四丁目	14世紀末～15世紀前半	1
	②大安寺旧境内	大安寺二丁目	15世紀末	1
	③大安寺旧境内	大安寺二丁目	16世紀前半	1

鎌倉・室町時代以降の製作技法

5 5 顎貼り付け技法	東大寺旧境内	雜司町	12世紀末	1
5 6 瓦当貼り付け技法	大安寺旧境内	大安寺二丁目	13世紀中	1
5 7 顎貼り付け技法	正暦寺旧境内	菩提山町	19世紀	1
5 8 糸切り痕の残る丸瓦	大安寺旧境内	大安寺四丁目	19世紀	1

珍しい瓦②

5 9 鉄線切り痕の残る丸瓦	正暦寺旧境内			
戦国時代				
6 0 多聞城創建軒瓦	多聞城跡			
6 1 郡山城同範軒平瓦	正暦寺旧境内			

江戸時代

6 2 巴紋軒丸瓦	①大安寺旧境内			
	②大安寺旧境内			
6 3 「菩提山寺」文字紋軒丸瓦	正暦寺旧境内			
「觀音堂」文字紋軒丸瓦	正暦寺旧境内			
6 4 接合部の刻み目がわかる軒丸瓦	正暦寺旧境内			

6 5 ~7 0 橋紋軒平瓦

影られた瓦

7 1 三彩施釉瓦

平城京左京二条二坊十二坪

法華寺町

8世紀

96

兄弟の瓦

同範瓦の新旧

7 2 軒丸瓦6 1 3 8 C a

大安寺旧境内

大安寺二丁目

8世紀

1

7 3 軒丸瓦6 1 3 8 C a

大安寺旧境内

大安寺四丁目

8世紀

1

7 4 軒丸瓦6 1 3 8 C b

大安寺旧境内

東九条町

8世紀

1

7 5 軒丸瓦6 1 3 8 C b

大安寺旧境内

大安寺三丁目

8世紀

1

7 6 軒丸瓦6 3 0 8 B

平城京左京三条四坊四坪

大宮町三丁目

8世紀前半

1

7 7 軒丸瓦6 3 0 8 B

平城京右京二条三坊三坪

首原町

8世紀前半

1

7 8 平瓦6 7 1 2 B

大安寺旧境内

大安寺二丁目

奈良～平安

1

7 9 平瓦6 7 1 2 B

大安寺旧境内

大安寺二丁目

奈良～平安

1

同範瓦の教えたくれること

8 1 飛鳥寺東南神院所用軒瓦

平城京右京三条一坊十四坪

三条大路五丁目

7世紀末

2

8 2 竹状模倣瓦

平城京右京四条四坊十二・十三坪

平松町

8世紀前半

4

8 3 平松廢寺所用軒瓦

東九条町

8世紀前半

2

8 4 姫寺廢寺所用軒瓦

東市跡推定地

8世紀前半

2

8 5 信濃國分寺同範軒平瓦

平城京右京二条三坊十六坪

西大寺国見町

8世紀後半

1

8 6 安芸国分寺同範軒丸瓦

平城京左京五条四坊十五坪

大森町

8世紀前半

2

8 7 插磨産軒瓦

平城京左京五条四坊九坪

大森町

8世紀

2

8 8 插磨産平瓦・熨斗瓦

平城京左京五条四坊九坪

大森町

8世紀

8

文字・記号のある瓦

8 9 修理司の文字瓦

平城京左京五条一坊十六坪

柏木町

8世紀

1

8 10 恽仁宮式文字瓦

平城京右京一条南大路

青野町

8世紀

2

9 0 恽仁宮式文字瓦

平城京右京二条三坊二・三坪

三条大宮町

8世紀中

1

9 1 大安寺の記号瓦

大安寺旧境内

大安寺二・四丁目

8世紀中

5

9 2 「矢」「田」「瓦」刻印瓦

平城京左京五条一坊十六坪

柏木町

8世紀

3

9 3 「西」刻印丸瓦

西大寺旧境内

西大寺小坊町

8世紀

1

9 4 蓼華紋押型土製品

平城京右京二条三坊七坪

青野町

8世紀中

1

9 5 ①土師器が混じる軒平瓦

元興寺旧境内

北室町

13世紀

1

②ウメの種子が混じる平瓦

平城京右京二条三坊十一坪

青野町

奈良～平安時代

1

③瓦器が混じる軒平瓦

西大寺旧境内

西大寺小坊町

13世紀

1



例言

- 1 この冊子は、平成 22 年 11 月 1 日～12 月 28 日まで奈良市埋蔵文化財調査センターで開催する平成 22 年度秋季特別展・平城遷都 1300 年記念特別展「平城の甍 - 平城京出土瓦展 -」の解説パンフレットです。
- 2 遺物写真の撮影は、秋山成人が行いました。
- 3 本書の執筆は、原田憲二郎・森下恵介が担当しました。
- 4 掲載写真は、展示品のすべてではありません。
- 5 本書の編集・レイアウトは埋蔵文化財調査センター職員の協力の下に、池田富貴子が行いました。

平成 22 年度秋季特別展 平城遷都 1300 年記念特別展

平城の甍 - 平城京出土瓦展 -

平成 22 年 11 月 1 日発行

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター

発行 奈良市教育委員会



奈良市埋蔵文化財調査センター

ARCHAEOLOGICAL RESEARCH CENTER, NARA CITY